

牧師室から (2021.12.26)

東北にいたときのことである。教会の後ろに牧師館があって、少し広い庭があった。その庭の道路に面したところに大きな桜の木があり、春になるとその花の満開を居間から見て楽しんでいた。また、家の出口に繋がる道を挟んで、桜の木に向かい合って大きなもみじの木があった。緑の葉っぱが秋に向かって赤く染められていくのも楽しみで、横に広がっている枝に真っ赤な赤ちゃんの手のような形の葉っぱがぶらさがっているのが、趣ある風情を感じさせた。しかし、落ち葉の掃除に悩まされ、切ってしまいたい誘惑にさらされることもあったが、その素晴らしい景色に惚れて思い止めた。また、草取りも負担になったりしたが、季節ごとに咲く色々な花を十分楽しむことでその苦労も報われていた。

ある冬のことである。薄く雪が積もった白い庭の片隅にオレンジ色が鮮明に見えた。近づいてみると小さな一輪のバラの花が咲いていた。講壇に飾ったバラの枝を、私が地面に差し込んでおいて忘れていたのだ。こんな寒さの中で、枯れた草や花が雪の中で見えないところに、生き生きとしたオレンジ色の小さなバラが顔を出していた。その不思議さに感動して、寒さも忘れて座り込んで暫く見つめていたのを覚えている。そして、自然に私の口から出て来る讃美歌があった。

「エッセイの根より 生いいでたる、
預言によりて 伝えられし
バラは咲きぬ。
静かに寒き 冬の夜に。・・・」(讃美歌 21-248)

この讃美歌の作詞家も、寒い冬に咲いている一輪のバラを見ながら、イエス様のことを思い巡らしていたのかな、と思うと、神様の恵みの御導きは、時間と空間を越えて続けられていることを改めて思ったことであった。

(鈴木善姫牧師)